

8回生

Yoshihiro Iwanaga

コピーライター・株式会社ロックスカンパニー 主筆



略歴／1938年生まれ。新高校制になって8回目の生徒（新宿高校8回生）で、同窓会「新八会」のメンバー。コピーライターとして広告制作で活躍する傍ら、「新宿MY CITY」「JR ioカード」「日立からまん棒」「JAL 悟空」「oillio」「東急bunkamura」「ホンダFIT, MOBIRIO, STREAM」など、ヒットネーミングを次々と誕生させ、ネーミングにおける 第一人者として評価を確立。広島平和アピールポスターは、MOMA(ニューヨーク近代美術館)のパーマネントコレクションとなる。東京コピーライターズクラブ幹事。『ネーミングが広告だ。』（宣伝会議）、『一行力』（草思社）、『すべてはネーミング』（光文社新書）など、著書多数。

ジャーナリスト志望から雑誌記者、そしてネーミングの第一人者へ

日活名画座と米軍ゴルフ場アルバイト

高校時代、授業をサボってよく映画館へ行きました。日活名画座（現在は新宿丸井がある）ではフランス名画祭1週間など、毎週プログラムが変わり、普通の映画は100円なのに、名画座は当時30円で鑑賞できました。だから、友達としょっちゅう、名画座に足を運んでいたのです。制服を着て、帽子を被ったまま観ていたら、後ろから頭をバコンと殴られ、誰かと思ったら美術の吉江先生でした。

でも、吉江先生は「帽子ぐらい取れ」とひとことだけ。登校して朝10時くらいから映画館へ行くなど、のびのびとやっていましたね（笑）。映画を観に行つて怒られることはなかったけど、映画少年はお金がかかる。それもあつて、アルバイトをしていました。住まいは当時、渋谷の神南町。いまNHKがあるところはその頃、在日米軍の施設で、兵舎・家族用居住宿舎などからなる軍用地、ワシントンハイツがありました。その辺りから神南町まで坂

東大を目指すのが当たり前だった時代

になっていて、そこに米兵の福利厚生施設としてゴルフ練習場があり、同級生何人かに声をかけ、いつしよにバイトしていました。仕事はいい思い返すと屈辱的な内容。米兵が打ったボールが飛んできて危ないから、大きなカゴの中に入り、すきを見て、落ちたボールを拾い集めるというもの。バイト代は時給300円、高校生は半額の150円だったけど、それでも他のバイトより高額でした。

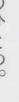
当時、新宿高校に入った生徒はみんな東大を目指していたし、大学といえば東大しかないと考えている親子が入ってくるような学校でした。しかし現実には、全員が東大には入れるわけではありません。新宿高校からは年に50〜60人、東大に受かっていましたが、生徒は1学年300人くらいいるから、大半は行けないわけです。そこで、東大の次くらいということで、東工大や教育大（現在の筑波大）、一橋など、そのあたりの大学を含めて100人ちょっと。当時、早慶は落ちこぼれが行くところで、それ以外の六大学はちよつと……新宿高校はそんな校風でしたね（笑）。

映画好きから新聞学科へ方向転換

当時、新宿高校には部活で社会科学研究会の集まりがあつて、僕も早熟なマルキストでしたが、絵がうまかつたので絵画部に入りました。それで、東京藝大へ行こうと思つて、絵画部でデッサンをやつたりしましたが、当然落ちるわけです。僕は進路を決めるのが遅かつたです。で、どうしようかと思いましたが、国立の入試科目は当時8〜9科目もあつたから、もう間に合いません。

正直、早稲田を選んだ決め手は入試科目数。早慶は3科目しかありませんから。早稲田は政治経済学部と法学部、あと絵をやっていたうえ映画が好きだから、芸術関連ということで文学部（演劇科）も受けました。結果はすべて合格。その後、政経のなかの新聞学科に進みました。

ジャーナリズムを選んだのは、日本映画が斜陽の時代に入っていたことも理由のひとつ。1957〜58年くらいのことで、映画は売れない時代です。に突入していて、演劇の勉強をしても食べていけないのではないかと危惧したのです。



前（1955年）後（1958年）でポーズをとる伊勢田先生と映画館がある建物（伊勢田先生が撮影した）

安保闘争と就活

大学時代は、60年安保の真つ只中。政治の嵐が吹き荒れ、東大の女子生徒が、安保闘争で亡くなりまし



新宿高校絵画部（1955年）。前列右端が岩永氏、中央でポーズをとっているのが吉江先生。後方の旗がたっている建物が伊勢丹。右後方に「東映」映画館。校舎のすぐそばに映画館があったのがわかる

た。それまでメディアは学生運動、安保闘争を支持していたのに、この事件を機に支持しないという宣言をしたのです。

それが、ちょうど就職試験の時期、いまでいう就活です。新聞社の入社試験では面接までいくものの、こちらも血気盛んな学生だから面接で議論をしてしまい、どこも不合格。

そんなとき、当時画期的な週刊誌を新しく出したという出版社「光文社」に拾われるようなかたちで入社しました。光文社のスタートは当時の、安保闘争に加わっていた「安保崩れ」ばかり。僕はそこで雑誌記者を4年やりました。

チャンスのきっかけは人との出会い

あるとき、光文社にアルバイトで来ていたデザイナーの岩崎堅司さんから、日宣美（デザイン団体）がやっているコンクールに応募したのでコピーを書いてほしいと頼まれ、面白そうだからと参加したところ、なんとグランプリを獲得。この受賞がきっかけで、記者を続けつつ、岩崎さんが在籍していた明治製菓でコピーのバイトを始め、28歳でコピーライターに転向しました。

1970年代後半、「IPM」というテレビ番組のなかで広告つくりのパロディをやるという企画があり、架空のプロジェクトのコピーライターとして、ふんどしの商品名を考えるように依頼されました。「ふんどしは日本古来のものだけど、グローバルに売りたい」と要求され、翌週、番組内で「ジャパネット」というネーミングを発表。これが反響を呼び、放送の1週間後にKKベストセラーズからネーミングに関する本のオフアが来ました。そこで、ネーミングを分析した本を出したところ、ネーミングの依頼が舞い込むなど注文が増え、気がついたところで僕はネーミングの第一人者のような存在になっていました。

雑誌記者からコピーライターへ、広告コピーが中心のコピーライターからネーミングの第一人者へ、と新たなチャンスをつかむことができたのは人との出会いから。どんな仕事も人間がやっていくのだから、人との出会いを大切にしなければ、新たな転機は訪れません。

将来どう変わるかわからないのだから、「自分はこの方向」と無理に早く決めつけず、後輩たちには幅広く勉強をしてほしいですね。新宿という土地柄、いろいろな意味で免疫力がつくため、新宿高校の卒業生はタフだし、みなさんにも大いに期待しています。



岩永氏によるネーミングと著書（の一部）